

小説・自伝の中の昭和南海地震

昭和 21 年 (1946) 12 月 21 日早朝、南海地震が発生し、四国各地に大きな被害をもたらしました。昭和南海地震の記録は郷土史、災害体験集などに数多く残され、四国災害アーカイブスにも収録されています。以下では、四国災害アーカイブスで収集対象としていない小説や自伝の中で、昭和南海地震がどのように描かれているかをご紹介します。

■森繁久彌「森繁自伝」

満州から引き揚げた森繁氏は、魚の闇商売をするために、知人の網元の甥を訪ねて現在の徳島県海陽町に来ていました。網元との話が済み、酒に酔って眠りについた森繁氏は、旅館の三階で地震に遭遇し、真っ暗な中をやっと玄関にたどり着きました。

「はだして表へ飛び出したら、遠く提灯が動いて、『津浪だ、津浪が来たぞ！山へ逃げろ！』の声が闇をつんざいて聞こえて来た。『山はどこだ』山も海も分からない。腰が抜けて立ち上れないのを、誰かがぐいと引っ張りあげてくれた。『山はどっちです』男はむんずと私をだいて山へ走った。」

■井上靖「闘牛」

「闘牛」は、戦後の混乱した世相の中で、大阪の新聞社が社運を賭けて西宮球場で開催する闘牛大会を題材にした作品です。小説の中では、昭和 22 年 (1947) 1 月に、伊予の W 市から神戸の三宮駅に 22 頭の相撲牛を貨車で輸送する途中、ひと月ほど前に起こった地震による影響が高松市にあったことを示す場面が描かれています。

「折悪しくぶつかった紀州沖の地震のために、高松では貨車を連絡船にすべり込ませるレールがずれてしまって、どうしても八輛の貨車の半分は、牛も荷物も一応貨車から降ろして、船に積込み、宇野で改めて別の貨車に積載しなければならなくなった。」

■獅子文六「てんやわんや」

「てんやわんや」は、昭和 20 年 (1945) 暮れから約 1 年にわたって、主人公が現在の宇和島市津島町をモデルにしたまち「相生町」で過ごした時の出来事などを綴った小説です。その中で、地震直後の「相生町」の家屋倒壊や津波被害の様子が描かれています。

「本町通りは、ほとんど全滅と言ってよかった。ブック・エンドを、不意に外した書籍のように、家々は倒れ、傾き、道路は、砕けた瓦と、壁土と、絡まった電線と、あらゆる塵芥で、埋められていた。しかも、その堆積物は無残に泥水で濡れ、下駄や、樋や、また漁村でなければ見られない、舟道具などが散乱していた。」

■宮尾登美子「仁淀川」

昭和 21 年 (1946) 9 月、主人公の綾子は夫と幼い娘とともに満州から引き揚げてきて、夫の実家がある仁淀川のほとり (現高知市春野町) で暮らし始めました。それから約 3 ヶ月後に起こった地震の時の様子が次のように描かれています。

「梁はギシギシと無気味な音をたてて揺れており、あれが落ちて来たら、と思うと咄嗟に綾子は自分の体でかぼうようにして美耶を抱き、梯子段を駆け下りた。暗黒のなかに天地は大きく左右上下に揺れており、その恐ろしいこと、恐ろしいこと、自分も美耶も体は木っ端微塵に吹き飛んでしまうのではないかと歯の根も合わぬほどふるえながら坪庭のまんなかにしゃがみ込む。」